

古典の事典

精髄を読む——日本版

6

一六六一—一六九二（江戸）

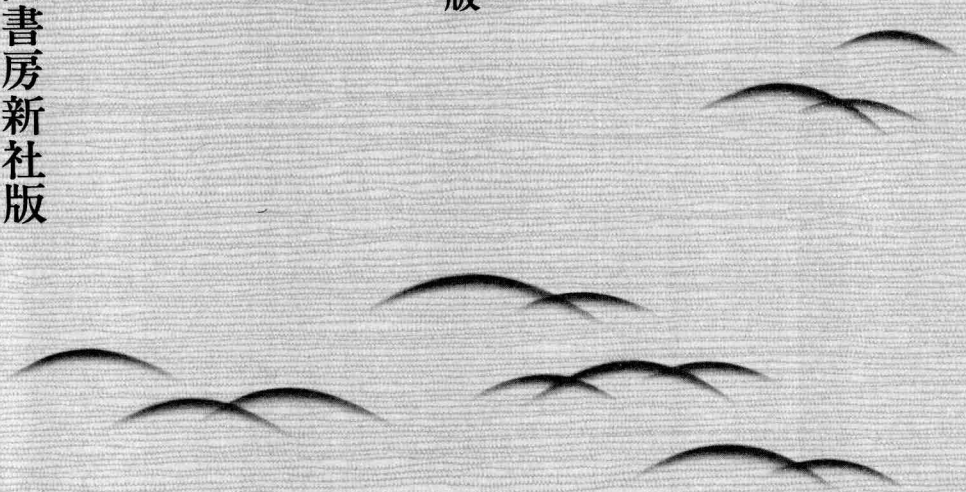
8

一六六一〜一六九二（江戸）

古典の事典

精髓を読む——日本版

河出書房新社版





古典の事典〈精髓を読む——日本版〉

⑧ 一六六一—一六九二（江戸）

昭和六十一年六月十七日 第一刷発行

編纂 古典の事典編纂委員会

発行者 清水 勝

株式会社 河出書房新社

発行所 東京都渋谷区千駄ヶ谷二丁目三二番二号
電話〇三・四〇四・一一〇一

印刷 大日本印刷株式会社
株式会社 サンコー

製本 大日本製本株式会社

©1986 無断転載複製を厳禁する

ISBN4-309-90208-1 C0591

まえがき 新しい文化の担い手としての町人の登場

好色一代男

主人公世之介の愛欲の生涯

好色一代女

懺悔告白の形式で書かれた転落の記

好色五人女

死を覚悟して燃える女たちの恋

日本永代蔵

金銭の世界を文学に描いた画期的作品

世間胸算用

町人の諸相を描いた西鶴晩年の傑作

浮世物語

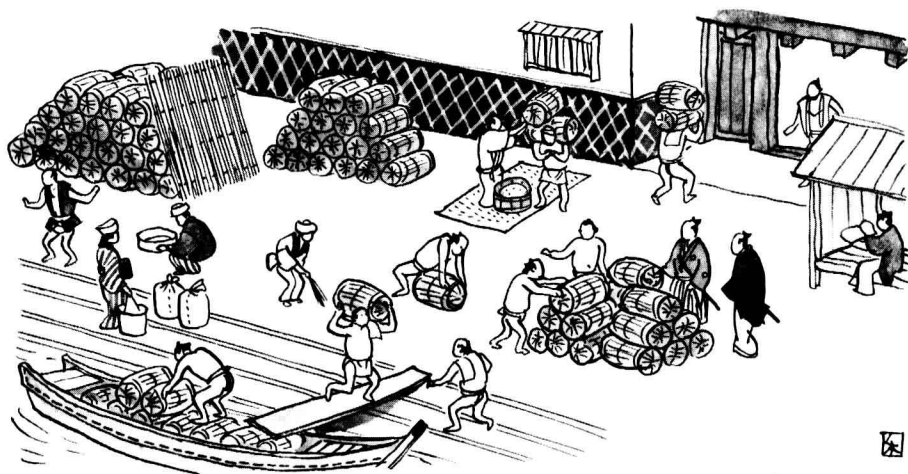
滑稽と風刺をちりばめた世相批判書

万葉代匠記

実証に基づく古代研究の金字塔

みなし栗

蕉風俳諧の開花を促した俳諧集



野ざらし紀行

『おくのほそ道』へ続く初の紀行文

一一五

帰家日記

和歌や漢詩を交えた紀行文

一二五

古今夷曲集

わが国最初の狂歌撰集

一三七

本朝通鑑

漢文で書かれた編年体の歴史書

一四七

雍州府志

実証的精神に貫かれた京都百科事典

一五七

盤珪禪師語録

日本禅思想上の代表的語録

一六七

靖献遺言

忠節の臣士への賛辞

一七七

垂加社語

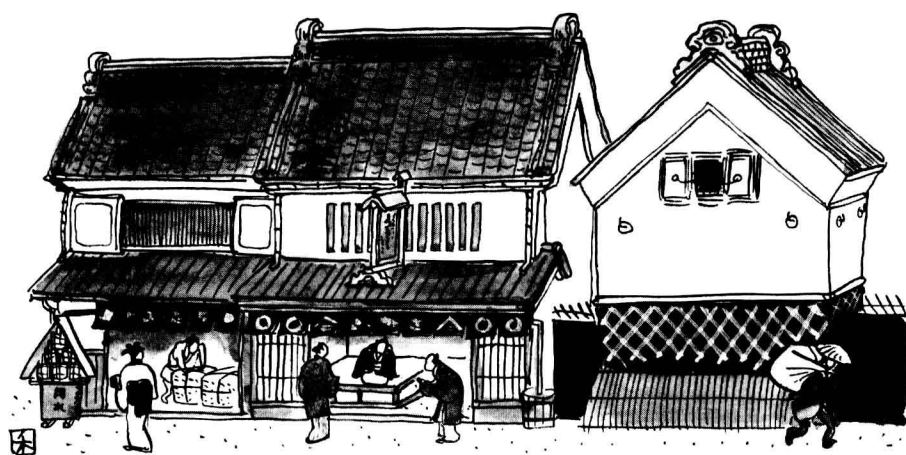
神道理解の真髓を語る書

一八九

聖教要録

官学の朱子学に対する批判の書

一九九



集義和書

武士の実践的修養論集

二〇九

語孟字義

生き生きと活動する人間とその世界

二一九

童子間

日常の人間生活の基本的思想化

二二九

集義外書

江戸時代の学者による広範な随想録

二三九

露がはなし

元禄期の上方庶民文化の粹

二五一

雑兵物語

庶民の言葉で書かれた戦場心得集

二六三

立花大全

立花の実技と秘伝の書

二七七

色道大鏡

遊里の実態を網羅した百科全書

二八七

本朝食鑑

日本の食物文化を知るための宝庫

二九五



匠明

大工棟梁が記す建築技術ノート

三〇五

会津農書

和歌で綴った農業技術書

三一五

天文図解

天文学における啓蒙書の草分け

三二七

日本長暦

暦学者の作った暦日の復元

三三七

算法闕疑抄

江戸初期の数学の集大成

三四九

庖厨備用倭名本草

食品に関する知識を網羅した食療学書

三六一

紫の一本

洒脱な筆致で描かれる江戸の名所

三七一

人倫訓蒙図彙

元禄初期の人間・世相百科図解事典

三八一

本朝画史

日本絵画研究史上の重要文献

三九五



この事典を利用される前に

○第八巻について

(一) この巻では、一六六一（寛文元）年から一六九二（元禄五）年の間に成立・刊行された古典を三十五作品収録しました。成立・刊行年の未詳のものについては、作者の生没年を拠りどころとしました。

(二) この巻に収録した古典は、それぞれ文学、歴史、宗教・哲学、社会、演劇・歌謡、芸道、生活、産業、科学、地理・民俗、雑書のジャンルに大別して、時代順に配列してあります。

○中扉について

(一) 収録古典にはすべて中扉をもうけて、分野、書名、著者・編者名、「この古典の五つの魅力」を表示し、原本写真を掲載しました。

(二) 書名、著者・編者名などに二つ以上の書き表し方、よび名がある場合には、学界・教育界で定説となっているもの、一般に広く用いられているもので表記することにしました。

(三) 中扉の「この古典の五つの魅力」では、作品の要点、分野、歴史的価値、後世への影響、現代との関わりなど五つの観点から、その古典の特色を簡潔にまとめました。

(四) また中扉には、現存する貴重な原本（版本・写本・古活字本など）から本文の一部を写真版で掲載しました。とくにこの巻でとりあげた「読みどころ」と関連の深い箇所は、参照頁を表示することにしました。

○解説について

(一) 作品の解説は原則として「あらまし」「原典の構成」「成立の時代」「影響と価値」「原典と参考書」「作品の舞台」「しおり」の七項目をもうけ、どこからでも容易に検索、読めるようにしました。ただし、作品によつては、必ずしも適合しない項目もあり、その場合には他の詳記すべき項目に重点をおき、その項目は省略することにしました。

○読みどころについて

(一) 読みどころでは作品の重要な場面、また一般に多く引用される箇所を抄出して、上段に原文を、下段に現代文を併載しました。

(二) 主要な作品については、鑑賞の手引きとなるように、現代文の冒頭に抄出箇所の概要を添えることにしました。

(三) 原文の仮名づかいは原則として、歴史的仮名づかいにしましたが、読みやすさを考慮して、ふりがなは現代仮名づかいとしました。ふりがなは外国の地名や特殊な用語を除き、すべて平がなで付すことにしました。

(四) 原文も新たにふりがな・送りがな・濁点・句読点・並列点（中黒）・段落を施し、さらに会話文・引用文には「レ」や「」を、書名には『』を加え読みやすくしました。また原文中の割注・頭注は（ ）でくくり、他の引用文と区別しました。

(五) 原文中の／＼、などのくり返し符号は使用せず同字を重ね、漢文体も読み下し文（平がなまじり文）にして、原文の説解鑑賞に役立つように配慮しました。

(六) 現代文は、わかりやすい内容にするために、難解な語句は説明を補記し、また旧地名は現地名を、和暦年数は西暦年数を表示することにしました。

○監修者

石井良助（東京大学名誉教授・法学博士）

伊藤鄭爾（元工学院大学学長・工学博士）

井上靖（小説家・芸術院会員）

数江教一（中央大学名誉教授・文学博士）

角田文衛（平安博物館館長・文学博士）

暉峻康隆（早稲田大学名誉教授・文学博士）

奈良本辰也（歴史家）

古川哲史（東京大学名誉教授・文学博士）

松浪信三郎（早稲田大学名誉教授）

山本健吉（文芸評論家・芸術院会員）

○編纂者

朝倉治彦（国立国会図書館司書）

遠藤武（文化女子大学教授・文学博士）

大曾根章介（中央大学教授・文学博士）

北小路健（歴史家）

紀田順一郎（評論家）

久保田淳（東京大学教授・文学博士）

祖父江孝男（放送大学教授）

田辺聖子（小説家）

谷沢永一（関西大学教授・文学博士）

馬場あき子（歌人）

春田宣（国学院大学教授・文学博士）

松田修（法政大学教授）

松本寧至（二松学舎大学教授・文学博士）

黛弘道（学習院大学教授・文学博士）

宮田登（筑波大学教授・文学博士）

吉田豊（歴史家）

新しい文化の担い手としての町人の登場

‡ 武から文へと世の中の様変わり

この巻に収められている作品が生まれた十七世紀後半は、大阪落城・豊臣氏の滅亡（元和元年＝一六一五）からすでに半世紀以上もたつて、世の中がすっかり落ちついてきた時代です。

諸国に戦乱が絶えなかったころはうって変わって、農民は仕事に励んで収穫を増やし、商人は物資の流通をさかんにして富を蓄えました。各地の鉱山開発もさかんに行われ、わが国は世界有数の金・銀・銅の産出国となりました。

このような平和と繁栄の恩恵をまっさきに受けとつたのは時代の支配者である上流武家階級です。

島原の乱（寛永十四～十五年＝一六三七～三八）を除いては国内の戦乱が絶えた結果、彼らの戦闘集団としての役割はうすれて、徳川家と諸大名は新しい貴族階級に、幕臣や諸藩の家臣たちは行政官僚・サラリーマンに変身していきます。

こうして幕府や諸大名家の姿勢も、かつてのような武力一点ばりの「武断主義」から、教育文化を通じて民衆の心をつかもうとする「文治主義」へと次第に変わってきました。

幕府は林羅山（はやしらざん）を重用して上野忍（しのぶがわか）岡に学問所（のちの湯島昌平坂学問所の前身）を開かせて朱子学の振興をはかり、諸大名家もそれぞれに高名な学者を抱えて、家中と領内の教育水準の向上につとめています。

芸術の分野でも、徳川家・諸大名家は、能楽・歌道・茶道・華道・礼法・香道など、王朝から室町にかけて公家・上級武家の間に伝えられてきた芸道の保護につとめました。

とりわけ、加賀（石川県）の前田藩、尾張（あわじ）（愛知県）の尾張徳川家などの大藩は学問・芸術の振興に熱心で、

そのため金沢や名古屋は今も能楽や茶道がさかんな土地となっています。

建築・絵画・工芸品などの分野でも、幕府や大名家は、御用達の名工たちに金銀を惜しみなく与えて腕を振るわせ、豪奢で華麗な作品の数々を生み出しました。

正保三年（一六四六）、三代将軍家光の命によって建てられた日光東照宮の神殿、とりわけ豪華けんらんたる陽明門は、この時代の武家階級の経済的実力と文化的関心を示す記念碑的な作品といえましょう。

‡ 創造性を失っていった武家の文化

しかしながら、幕府・諸大名家によって前代から受けつがれた文化は、もっぱら古来の先例格式を厳格に守って後代に伝えることに重きがおかれ、総体としては新たな創造発展をとげることはできませんでした。

それは、これら伝統文化の新しい担い手となった武士たちの保守化、もつと厳しくいえば無氣力化の反映といえます。

運と実力次第で、一介の野武士や浪人が大名となることさえ可能だった戦国乱世とは一変して、武家社会の身分序列がちちりと固定されてしまったのがこの時代です。なにごとくも先例どおりを厳守することによって失点を防ぎ、先祖から伝えられた領地・俸禄・地位を失うまいとする姿勢が、武士たち、特にその上層部に骨の髄までしみついてしまったのは無理もないことです。

このような意識を持った上流武家階級の保護と、そのもとに育成された固定的な家元制度によって、さまざまな古典芸術が何百年も昔の姿のままで現代に伝えられていることは、外国には例の少ない日本文化の特色です。これはおおいに意味あることといえましょう。

しかしその反面、師匠から伝えられた型を守ることだけが厳しく求められ、多少でも創造的・革新的な試みは破門によって制裁されるという体制の中で、多くの古典芸術がその創成期の生命力を失って現代人にアピールしにくいものになってしまったというマイナス面をも指摘しないわけにはいきません。

学問や文芸の世界でも同様で、長い江戸時代を通じて、上流武家階層の中からは、後世に残る真に創造的な業績は、ほとんどといってよいほど生まれてはいません。

私たちが江戸時代文化の遺産としてすぐに思い浮かべる小説・俳句・川柳・歌舞伎・浄瑠璃・落語・講談などのさまざまな文芸は、ほとんどが町人出身か、裕福な町人の後援を受けた下級武士出身の作家たちによって生み出され、庶民大衆に歓迎されて大きく発展しました。浮世絵・錦絵に代表される江戸時代美術についても、その事情は同様です。

このようにみるならば、江戸時代の文化芸術の主導権は、制度上の支配者である武家階級の手を離れ、士・農・工・商の最下位におかれた工・商の町人、とりわけ商人の手に握られていたことがわかります。

ややおおざっぱな言い方をしまえば、江戸時代の文化芸術は「町人の、町人による、町人のための文化芸術」であったということができます。

この新しい文化の担い手が、さっそうと登場してきたのが、本巻に収められている作品群が生まれた時代なのです。

※ 町人の生活水準向上と大衆文化時代の到来

江戸時代に入って町人階級が文化の主導権を握ることができるようになった背景には、その経済的実力の向上があります。

当時の武士の収入は、先祖代々定まった領地から取り立てる年貢米か、米で現物給与される俸禄で、これを商人の手を通じて現金に換え、日常の用を足していました。受け取る米の量は一定不変ですが、その流通はすべて商人の手に握られて巧みに操作され、価格は一般物価に対して常に低めにおさえられます。このため生活水準の向上と諸物価の上昇の中で、武士の収入は、上は幕府の財政から、下は中・下級武士の家計に至るまで、じりじりと窮迫の度を増していきました。

これに対して町人の世界では、特に江戸時代前期の経済発展期にあっては、ちょうど戦国時代の武士がそうであったように、運と努力と才能次第では一代で大金持ちとなる可能性が開かれていました。

優勝劣敗の競争社会であった江戸時代の商業界では、没落して姿を消していく者も少なくありませんでしたが、全体として天下の富は町人の懐に集まり、その生活水準は着々と上昇していきました。

当時の『我衣』(加藤玄悦著)という書物には「寛永十六年(一六三九)ごろまでは、武家はともかく町人や農民などの衣服はすこぶる粗末だったが、寛文年中(一六六一〜七三)、男女の衣服は次第にぜいたくなってきた」とあり、寛文元年が丑だったことに引っかけ「馬ならばいくつかはねん丑の年 きてもはねたり寛文元年」(これが午年だったなら、よくよくひどくはねあがつたことだろう。丑年だというのに、ずいぶんとはねた寛文元年だったことよ)との歌が添えられています。

このような消費水準の向上は、相対的に武士の困窮化を招きますから、幕府は早くも寛文八年、儉約奨励、ぜいたく厳禁のお触れを出して、高級衣料の製造販売を厳しく取り締まりました。しかし、その効果は一向にあがらず、以後幕末に至るまで、幕府は繰り返し繰り返して、ことこまかな儉約令を出しつづけています。

庶民の経済的ゆとりが生んだ生活文化の向上を示す現象としては、井原西鶴に代表されるベストセラー作家による出版業の発展、お伊勢詣り・金比羅詣りをはじめとする旅行ブーム、大衆文化サークルとしての俳句や謡曲の講の流行、芝居・遊廓・料理屋などサービス産業の繁栄等々があげられます。

このように広い底辺があったからこそ、今も世界に誇ることができる町人文化が花を開くことができたのです。

‡ 芭蕉や西鶴を支えた広範な門人や読者層

大衆的な地盤に支えられて学問や芸術にうち込むことができたという点で、江戸時代の学者や芸術家は、それ以前の人々に比べてはるかに恵まれていたといえます。

たとえば松尾芭蕉は、世を捨てて風雅な漂泊の生涯を送った西行法師を深く敬慕して、その足跡をたどる旅を重ねていますが、その旅の厳しさという点では、時代による大きな相違がありました。

源平争乱から鎌倉幕府創立前後の時代を生きた西行にとって、戦乱で荒れ果てた各地をめぐる風雅の旅は、文字どおり命を賭けた捨身の行でした。

芭蕉もまたその精神を受け継ぎ、みちのくに旅立つ『おくのほそ道』の冒頭では「古人も多く旅に死せるあり」「前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそそぐ」と、旅路の露と消えても悔いがないという悲壮な心境を述べています。

この芭蕉の感慨に嘘はなかったでしょうが、旅の実態は西行のそれとはずいぶんと違ったものでした。

当時の旅は、今日の観光旅行と比べれば、まことに不自由で辛いものではありませんが、西行のころとは違って、少なくとも往來の安全は保障されており、しかも芭蕉の場合、行く先々で彼を慕う門人や同好者が待ち受けて暖かく歓迎しているのです。

『おくのほそ道』にも記されている羽前尾花沢（山形県尾花沢市）の豊かな紅花商人で俳人の鈴木清風の邸に逗留して歓待されていたというエピソードには、芭蕉が「中央の有名文化人」として重んじられていたことが示されています。

芭蕉の周囲に集まっていた門人の中には、例の「蛙とびこむ水の音」で名高い江戸深川の芭蕉庵を提供した幕府御用達の魚問屋鯉屋杉風をはじめとして、呉服商の岡田野水、医師の山本荷兮、材木商の加藤重五、米穀商の坪井杜国など富裕な町人が多く加わっていました。芭蕉の風雅ひとすじの生涯も、これらの人々の支えがあったればこそ可能であったのです。

時代が生んだゆとりが、芸術家の天分を開花させたという点では、事情こそ違いますが、浪花が生んだ世界的大家井原西鶴についても共通するものがあります。



蕪村の筆による『奥の細道画巻』。那須野を馬で行く芭蕉と門人曾良。日光を経て那須に入った芭蕉は、野飼いの馬を借りて旅を続ける。風雅の人西行の精神を受け継いだ『おくのほそ道』の旅は、行く先々で門人たちに暖かく迎えられた。

寛永十九年（一六四二）、新興の商業都市大阪で、手代^{てだい}二、三人を使う中級の商家に生まれた西鶴は、十五、六歳のころから当時の商家の若者の趣味だった俳諧^{はいかい}を学んで、めきめきと頭角を現し、二十一歳のときには鶴永^{えい}と号して、採点^{てんじや}をして謝礼をとる点者^{てんじや}となります。そのうち、俳諧革新派の大御所西山宗因^{にやまそういん}の門人となって西鶴を名乗ります。

その作品は師匠をさらに上回る自由闊達^{かうたつ}さで、それまでのしきたりなど無視した人間臭いものでした。そのため彼は旧派の俳人たちからは「放埒^{ほうちやう}拔群^{はくぐん}」とけなされ、日本人離れしているとの意味で「阿蘭陀^{おらんた}西鶴」と呼ばれています。

三十四歳の春、妻を失った西鶴は、三人の子供の養育と店の経営を手代に任せ、自分は頭を剃^そって一人暮らしの隠居生活に入ります。

それは、いよいよ文学ひとすじに生きようとする決意の表れでした。

当時、商家の主人が、まだ働きざかりの年齢で家業を離れて隠居するのは、さして珍しいことではありません。しかし、そのほとんどは、多くの家産を相続した二代目・三代目が、面倒な商売を廃業し、親の遺産で一生を遊び暮らすための隠居でした。

このような身勝手な若隠居を、西鶴自身、のちの『日本永代蔵^{にっぽんえんたいくら}』で「いかにおれが金銀つかふてすればとて、天命をしらず」と批判しています。

しかし西鶴の隠居はそれとは本質的に違って、文学のプロとなるための、当時としてはただ一つの許された道だったのです。

それにしても、これが可能だったのは、彼自身が店持ち^{たな}の商家の主人であり、また俳諧による名声と多くの支持者を持っていたからにほかなりません。

こうして、世間的な束縛から解放された西鶴が精魂をこめて書きあげた『好色一代男^{こうしきよくいちおとこ}』は、天和二年^{てんな}（一六